

複合文化学通信

第5号

(2007年1月24日発行)

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部
複合文化学科「複合文化学通信」編集部

(編集責任 / 福田育弘)

「教室の外で楽しんでいることを、教室の中で学問にしておこう！」

今回は、まずフランス現代思想を専門とする 渡辺 芳敬〔わたなべ・よしとか〕先生です。

研究テーマは「ものの見方や感じ方をもともと見なおすこと」です。

わたしの専門はフランス現代思想ですが、
つねづね、もろもろのものの見方・感じ方そのものを検討することからはじめたいと思っています。
異なったものの見方・感じ方によって、世界がまったく違って見えてくるからです。
違う世界を見たい、世界を違った目で見たい、わたしの思いはその一点につきるのかもしれませんが。
ですから、研究対象は狭い意味での思想にとどまりません。
旅に出ることも、観劇に走ることも、すべて世界の見方・感じ方を学ぶことだと思っています。
見方は見え方と不可分です。
日常からの離脱——フィクション——によってしか世界のすがたは見えてこない。
越境への想いといったらいいでしょうか。

渡辺先生のもとで（学際コース「現代社会演習」）まなぶ Oさん（学際コース4年）の

卒業論文のテーマは「仮名手本忠臣蔵におけるお軽と勘平」です。

Oさんの場合、パレスチナ問題への関心から、三年のゼミではサイドを対象にし、
プロパガンダについて調べていました。
その延長でコンラッドにぶつかり、越境の問題にいきついたかと思いきや、
突然、歌舞伎座で見た「仮名手本忠臣蔵」、わけても勘平役の片岡仁左衛門にはまってしまいました。
そこから急遽、卒論のテーマは「勘平・お軽」へ。
勘平・お軽のすれ違いのドラマを忠と恋、男と女、さらには死と生の交錯として論じてくれました。
まったく関係がないように見えても、彼女のなかではすべてがつながっています。
さまざまなレベルでの越境——国境を超えることから、民族間や男女間のボーダー、
いては生と死のボーダーを超えること——を問題にしているからです。
彼女を見ていると、卒業研究とはつくづく、自分のこだわりを発見する旅のような気がします。

つぎは、「**情報化社会と教育について考える**」ことをテーマにしている

楠元 範明〔くすもと・のりあき〕先生の研究内容を紹介します。

現在の私の専門はおもに「高等教育とその情報化」です。

すなわち大学生のみなさんが大学で学んでいくなかで、情報化が何をもたらすのか、何が問題なのか、どのようにしたらよりよくなるのか、といったことを研究しています。

その関係で早稲田大学の情報環境や情報教育を担当する
メディアネットワークセンターの教務主任も兼任しています。

情報化社会の進展が激しい今日、この分野の研究の成果は大学のなかだけにとどまらず、
広く社会一般の人々に対しても有効なので、たとえば携帯電話会社の KDDI との「生涯学習サポート
システムにおけるネットワーク利用環境技術に関する研究」といった共同研究なども行ってきました。

人と人とが向き合っていないと教育とはいわない、などという殻から飛び出して、
インターネットや携帯電話、ゲーム端末などを活用した新しいかたちの教育を考えてみませんか。

つづいて、すでに第2号で紹介した「身体表象論」を研究テーマにしている神尾 達之〔かみお・たつゆき〕先生
のもとで、卒業論文にとりくんだ澤木 類〔さわき・るい〕さんの研究テーマは

「**遊ぶってどういうこと**」です。

「遊ぶことって、私たちにとってどんなものだろう？」

私の卒業研究は、この疑問からスタートしました。

おもちゃ、ゲーム、テーマパークで遊ぶとき、私たちは遊ぶことに没頭します。
たとえば変身ベルトを付けた時、遊びに熱中するあまり、遊び手はヒーローになりきることができます。

また、東京ディズニーランドに行けば、ディズニー世界の住人に仲間入りできます。

つまり遊びによって、私たちは自分でない他者になることができます。

以上のように、私はおもちゃやゲーム、テーマパークが
私たちに与える影響や、関係について研究しています。

最後に、ラテンアメリカ文学の紹介者であり、また数多い作品の翻訳者でもある
野谷 文昭〔のや・ふみあき〕先生の研究テーマです。

「**文化を生きたものとして捉えること**」

私はおもにラテンアメリカの文学や映画を研究の対象にしてきました。

かつて植民地だった地域で、たとえば征服がもたらしたスペイン語によって、

スペイン本国では不可能な言葉の実験や混淆〔こんこう〕が自由に行われ、

その地で生まれた新しい物の見方や考え方を表現し、世界を解きほぐす現象に魅力を感じた
からです。それは、すでにある権威や権力や制度が作られたものにすぎないことを暴いてしまいま
す。研究を通じてえられた目で今度は日本や他の世界を眺めると、今までとは見え方がちがってきます。
「北」や欧米の権威を相対化できたり、日本的作家だと思っていた人や作品が、実はラテンアメリカの
作家や作品に近いことが分かったりもします。

もうひとつ惹かれるのは、この地域を俯瞰〔ふかん〕したときに見えてくる、

大陸的な規模で人が移動して文化を運び、変容させる様子です。

文化が生きていることを実感できるからです。

「こんな科目、こんな内容」

今回は2年から4年にかけて履修する《講義》科目である「複合文化学特論」を紹介します。

「複合文化学特論1～22」は、半期2単位の科目です。

前期に11科目、後期に11科目おかれた計22科目のなかから、最低4科目8単位を履修してください。
もちろん、それ以上履修してもかまいません。

前号では《講義》と《演習》の違いについてふれました。覚えていますか？

複合文化学科におかれている《講義》のなかでもっとも数が多いのが「複合文化学特論」です。なんと、全部で22科目も置かれています。

名前に「複合文化」という言葉のついた《講義》には大きく分けて2種類のものがあります。

ひとつは1年で履修する「複合文化学の建築物」「複合文化学の開拓地」、2年の「複合文化学の道具箱」「複合文化学の組立方」、3年の「複合文化学の見取図」というシリーズです。

複合文化学の具体的なイメージをつかむところからスタートし、さまざまな概念や方法を学び、最後には複合文化学とは何かという全体像の把握にいたる、複合文化学科の基幹科目です。この流れについては、第2号の「アジアンビューティーをどう学ぶ？」のところで簡単に説明しておきました。

もうひとつが今回紹介する「複合文化学特論」シリーズです。

複合文化学科がもっとも大切にするのは、みなさん自身が見つけだした具体的なテーマです。

自分自身でテーマを見つけ、そのテーマについて複合文化的にさまざまなアプローチをし、卒業論文の形でまとめることが、この学科での学びの最終目標になります。

そのテーマ探し、そして、テーマが見つかったあと、そのテーマにどのようにアプローチしていったらいいのか、ヒントをあたえ続けるのが、この「複合文化学特論」です。「複合文化学特論」は現代社会を考えていくうえで重要な22の具体的なテーマをとりあげ、一つのテーマに

ついて半期の授業を用いて、多面的に考察していきます。

ちなみに、現在予定されている22のテーマは以下のようなものです。

- 1 異文化交流接触論
- 2 華人ネットワーク
- 3 機械翻訳と異文化理解
- 4 留学から見た世界
- 5 ハイブリディティ＝「混血」への眼差し
- 6 異種交配と立体芸術
- 7 カーニバル論的視点から文化を捉えなおす
- 8 越境するミュージック
- 9 視覚芸術から見えてくるもの
- 10 モダン・アートと芸術の終焉
ー マネからデュシャンまでー
- 11 ポピュラーサイエンスにみる大衆の欲望
- 12 カルチュラル・スタディーズの現在
- 13 都市空間の解読学
ー 複合都市を歩いてみようー
- 14 都市の表象・表象としての都市
- 15 多様な観点から考える環境論の課題
- 16 環境政策について考える
- 17 〈私〉はひとりじゃない
ー 〈私〉の複数性ー
- 18 複数あるセクシュアリティ・
セクシュアリティの複合性
- 19 味覚というメディア ワインという思想
- 20 記憶／物語、記録／データベース
- 21 思想としてのヨーロッパ
- 22 戦争と〈帝国〉の脱・構築

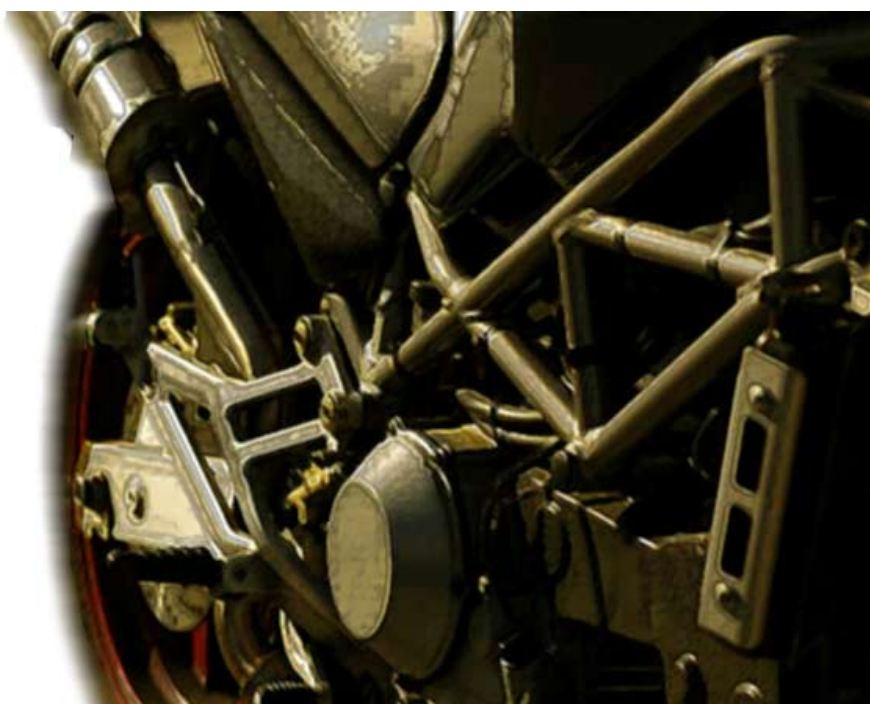
《モーターサイクル・ダイアリーズ》2004 年イギリス＝米国合作

ウォルター・サレス監督

出演：ガエル・ガルシア・ベルナル、ロドリゴ・デ・ラ・セルナ、ミア・マエストロ他

ラテンアメリカ映画なんて全然知らないという人でも、『モーターサイクル・ダイアリーズ』というタイトルなら、どこかで耳にしたことがあるかもしれません。

『モーターサイクル・ダイアリーズ』は、キューバ革命（1959 年）の闘士として知られるアルゼンチン人エルネスト・チェ・ゲバラ（1925-67 年）の、若き青春時代の南米大陸放浪を描いて大ヒットを飛ばした映画です。バイクでの旅ということもあって、原作の翻訳（角川文庫刊）はバイク好きたちのあいだでもけっこう売れた



ようです（といっても、じつはバイクで旅するのは映画のほんの最初だけなんですけどね）。

ゲバラは、1960 年代の「政治の季節」を生きた当時の日本の若者にとっても、英雄的な存在でした。「革命」に殉ずるという行為が、ある種のリアリティをもってせまってきたのです。なんだか想像もつかない気がしますね。

では、現代を生きるみなさんにとって、ゲバラはどのように評価できる

でしょうか。いまでは明らかに欠点だと思えることもあるでしょう。逆に、いまでこそ光を当てるべき価値もきっとあるはずです。

『モーターサイクル・ダイアリーズ』は、チェ・ゲバラというひとつの「歴史」を、私たちに「再発見」・「再解釈」する機会を与えたくれたという意味で、とても貴重な作品です。そして、この「歴史」を「再発見」・「再解釈」という実践こそが、じつは現代の複合的な問題を解きほぐすうえで役に立つのです。

「自分探し」とは最近流行りの言葉・行為ですが、若き日のゲバラにとっての「自分探し」の旅は、決して自己完結・自己満足に終わるのではなく、社会現実に対して「開かれていく」自分を発見することであったと知るだけでも、この映画に観る価値はありそうです。(G)

第 6 号は 2 月 15 日発行予定です。今後は月 1 回発行の予定です。

背景画像：フランス、モン・サン・ミッシェル修道院、©2007 I. Fukuda

4 頁画像：フリー画像素材 EyesPic (<http://eyes-art.com/pic/>)